

第四項 悦峯禪師との対面

『略記』の本伝遺事に次のような記載がある。

惟時正徳二年冬十一月黄檗悦峯禪師始来江府詣文昭院殿牌前已亦礼見于師云我在支那聴師佳名既旧今既得良遣是予大幸云云且曰吾亦信淨教修念佛然間雖宗塗異西皈之志同故今尽衷曲得遂素志也矣後歷兩三載悦峯遠送一捧書於師問候也荷法微志呼夫無私者乎是乃師俊徳而令尔而已

『行状記』にその書が出ていたので引用しておきたい。

前住増上祐天大僧正慈啓 支那西湖唐

僧字悦峯法名道章来朝三十年矣今住山

城州宇治黄檗万福寺独湛老人法嗣也謹

啓 法幢垂晚道頼人興九鼎一絲如千岐坐

断恭惟 大僧正座下 夙乘願力赤手啓

沃於群生高奪錦標宗音伝唱於金殿古今

遐仰百世潛思章昔拜別蓮室屈指三戴矣

因想手中如意精神如旧固宜逐時間候只

恐混淆清淨觀門然而求生之念千里同風

頃聞座下退步官刹獲此放間之處緬惟

黃花翠竹別有住趣實是法身長養之日人

天慶讀之秋也令人不勝景望嵩祝之至

謹脩短箋奉賀併候近况唐茗壹箱引意敢

祈慈納是荷

外附和書一緘謹奉侍司下以叙悲懇下

情冀垂照亮章不勝感戴之切至禱々々

恭上

前住増上祐天大僧正座下

黄檗道章和南拜

十月十五日

この書は、「縁山志」十〔浄全〕十九、五〇〇頁にも引用されているが、主文のみしか載せていない。

悦峯は、宝永五年三月二十四日綱吉に呼ばれ法門している（『常実記』）ほどの名の通った名僧であった。そしてこのとき増上寺に来て了也とも会っている（『縁山志』十、『浄全』四九三頁）。家宣の時代になっても宝永六年九月十五日に家宣の將軍継承の祝いに参上している（『文実記』）。『有章院殿御実記』（以下『有実記』）には、悦峯の参詣の記述はないが、悦峯は家宣に会っていることから、薨去ののち、その牌前にお詣りした可能性は高い。薨去は正徳二年十月十四日であり、『略記』には翌月のこととなっているから時間的にはありうることである。

悦峯と祐天の話の内容であるが、伝記上の多少の脚色も感じられる。それは、書によると悦峯は来朝して三十年と言う。書の宛名から言うと言昭院殿の三回忌の終わった正徳四年の書と推定され、そこから三十年前は、貞享元年にあたる。その年、祐天はまだ増上寺の学寮にいた頃である。もし、本当に悦峯が祐天の名を中国で聞いていたとすれば、それは累得脱の話以外には考えられない。真実とすれば祐天の名声はとどまるところを知らない勢いであったと考えられる。

しかしながら、累の話はあつたけれども、それが有名になるのは『聞書』の発刊が引き金になっていられると思われ、おそらく宇治の黄檗山で伝え聞いた話が大きくなったものと推測されるのである。

この話が、伝記上重視されるのは、幕府の命によって作られた隠元禅師を開祖とする黄檗

宗の当時首座にあった悦峯が、祐天を尋ねその道名に敬服し書までしたためたという事実であろう。

第五項 家宣と祐天

綱吉亡きあと、政治改革を進める家宣は祐天にどのような思いを持っていたのであるうか。先にも述べたが、門周は宝永七年に一度家宣に辞意を表明している。しかし、このときは家宣は特に祐天を増上寺に登らせることを考えてはいなかったようである。しかし、常憲院殿の三回忌（宝永七年十月十日結願）、桂昌院の七回忌（正徳元年六月十九日結願）（『文実記』）が終わると、家宣は門周に辞職を促し（『縁山志』前出）、祐天を即席大僧正として取り立てたのである。破格の待遇であることは言うまでもない。

儉約を旨とする家宣の政策上、表向き祐天とのかかわり合いは『文実記』には少ない。残念ながら、家宣は、翌正徳二年十月十四日薨去し、表面上のつながりに関しての資料はほとんどないと言つて良い。しかしながら、家宣のため

馳セテ使平増上寺ニ大殿之中別所ニ奉安阿弥陀佛像ヲ「割注」
倚像イニシテ高二尺六寸世称スルハ
黒本尊ト「者是也」ナリ請ニ入レ之ヲ於ニ宮中ニ

（略記）